

一貫性を考慮した家庭科カリキュラム構想と その改善に関する研究（第3報）

— 学習者の自己評価を手がかりにして —

加 地 芳 子・榊 原 典 子・稲 木 昇 子・久 保 直 美・北 崎 亜 希 子
(京都教育大学) (京都教育大学) (附属高等学校) (茨木市立北中学校) (附属京都中学校)

國 府 美 幸・岸 田 蘭 子・八 束 有 子・野 町 博 美・小 西 民 子
(附属桃山中学校) (京都市立西院小学校) (附属京都小学校) (附属京都小学校) (附属桃山小学校)

Home Economics Curricula Construction and Improvement (Part3) — Improvement of Curricula by Self-evaluation —

Yoshiko KAJI, Noriko SAKAKIBARA, Syoko INAKI, Naomi KUBO, Akiko KITASAKI,
Miyuki KOKUFU, Ranko KISHIDA, Yuko YATSUKA, Hiromi NOMACHI, Tamiko KONISHI

1999年9月30日受理

抄録：各附属校における家庭科の学習の学びの実態を知るために、1年間の学習後に学習者による自己評価を行った。まず、「一年間の学習のふりかえり」における自己評価によって、各校ともカリキュラムの中で教師が意図していたことが学習者にどのように捉えられていたかを知ることができた。次に、「目標の観点」(育てたい力)に基づく自己評価では、我々が「基本カリキュラム」をベースにしながら、各校でたてたカリキュラムの妥当性を検証しようと試みた。評価結果を比較検討する中で、分析されたことは各校のカリキュラムの見直しの手がかりにすることができる。

キーワード：自己評価、目標の観点(育てたい力)、機能的学力、学びの実態

I はじめに

自己評価は、毎時間の学習後あるいは、単元終了後に学習者自身に自己の学びを振り返らせ、学習の成果や課題を自覚させることが多い。我々は、「家庭科」という教科の特質からみても、学習者自身が自己の学びの成果を実感することに意義があると考えている。前報で述べたように各附属校においては、基本カリキュラムをベースに学習者の実態とねらいを明らかにして作成したカリキュラムに基づいて指導を進めてきた。本報では、学習者による自己評価を通してカリキュラムの妥当性を検証することにする。

一年間の学習を振り返ることによって、学習者は自己の学びの成果や課題を実感することができる。振り返りのスパンが長ければ長いほど、学びの成果や課題を幅広く、深く捉えることができる。ここでは、我々が自己評価の対象としたことは、単に、習得した知識や技能の量だけではない。むしろ、そのような量的な成果ではなく、自分が学習のどのような部分に成果を

見いだすことができたのか、学習のどのような部分に有用性を見いだすことができたのかを、自覚させることがねらいである。いわゆる、機能的学力の形成を評価するものである。

II 調査の目的

本報では学習者の学びの実態を捉えた上で、より学習者の実態に即したカリキュラムに改善していく方法を明らかにしたいと思う。そのために2つの調査を行うことにした。それぞれの調査の目的は次の通りである。

まず、[調査1]では1年間のカリキュラムを学習者に提示し、指導者がカリキュラムを編成する上でねらってきたことを観点として、学習者がそれをどのように受け止めているかを評価させた。学習者がどのような学習に対して有用性を感じたり、どのような学習形態の場合にどのような効果があると感じたりしているのか、発達に応じてその反応を分析することにした。

次に[調査2]では、各校のカリキュラム作成時にあげていた基本目標の26の観点について、学習者に4段階で自己評価させた。1年間のカリキュラムでねらっていた基本目標を学習者が自己評価することで、指導者の意図との合致性を見ることができる。各校のプランで重点的にねらってきた目標の観点に対する学習者の反応から、その手だての有用性を論じることができる。また、各校種や男女別に分析すると、学習の成果や課題の発達段階や男女による差を見出すことができる。

このように、2つの調査を行うことによって、学習者の学びの実態を捉え、カリキュラム改善の糸口にすることができると考えた。

III 調査方法

1. ワークシートの作成

我々が実施してきたカリキュラムに対する学習者の受け止め方を分析するために2つの調査を実施した。この2つの調査は学習者に対してアンケート形式で行うものである。ワークシートは共通認識としての基本カリキュラムをもとに、各学校で実施したカリキュラムに対応した項目と校種別の共通項目を検討し作成した(図1、図2参照)。
[調査1]はカリキュラムごとに評価項目を検討し、学習者は◎・○・△の三段階評価を行い、また学習者の思いを記述式で記入できる欄を設けた。
[調査2]は校種別の共通項目について学習者が4段階で評価した。

2. 調査時期および調査対象

調査時期について平成9年度は各学校、[調査1]・[調査2]ともに学年末のカリキュラム終了後(2月～3月)にアンケート調査を行った。調査対象者(人数)は右にまとめる。

表1 調査1・2における学校別対象者数

附 属 校	対象者数	計	有 効 数	
			男	女
京小	5年	76	73	38 35
	6年	113	104	54 50
桃小	5年	80	80	40 40
	6年	78	78	38 40
京中	1年	118	114	53 61
	2年	119	108	48 60
	3年	120	110	55 55
桃中	1年	130	128	62 66
	2年	135	126	60 66
	3年	136	128	64 64
高校	1年	200	199	83 116
	2年	200	192	80 112
全体(回収率) 95.6%		1505	1440	676 764

5 年 一年間のふりかえり

この1年間の学習を振り返って、思ったとおりに答えて下さい。

- ……よく当てはまる
 ◎……だいたい当てはまる
 △……あまり当てはまらない

氏名

	1 学 期				2 学 期				3 学 期
学 習	家族の仕事と わが家	わが家の料理名人をめざそう	わが家の 片づけ名人をめざそう	わが家のそうじ名人 をめざそう	買い物の名人を めざそう	学習のテーブルを作ろう			
した こと	家族の仕事 しらべ	自分 たんけんを しよう	料理名人は、料理料理も おまかせ おまかせ	持ち物 チェックリスト を作ろう	整理に役立つ ものを作ろう	中学校を きれいにしよう	家庭から 出るゴミを 調べよう	買い物に出かけよう	コースターとランチョマット を作ろう おやつパーティー をしよう
楽しい活動だった									
自分の暮らしぶりを 振り返れた									
自分らしさが 出せたと思う									
友達の話や考え が参考になった									
みんなで協力して 学習できた									
自分の生活に役立 つと思う									
自分なりに家庭で 工夫したことや 考えたことが あれば書いて 下さい									

図1 調査1「一年間の振り返り」 ワークシート — 京都小学校 5年生

家庭科アンケート（高等学校） 年 組 番 氏名

目 標 の 観 点		良 く 当てはまる	大 体 当てはまる	あ ま り 当てはまらない	全 く 当てはまらない
1. 自己尊重 自分らしさに気づき、自分を大切にし、自分の力で考えて自らの意見を確立し、自信を持って表現できる。	1				
2. 判断力 自分が置かれている立場や状況を見極め、判断することができる。	2				
3. 意思決定力 いくつかの選択の可能性がある中から、自らの価値観に基づいて自己決定できる。	3				
4. 実行力 生活に必要な仕事の重要性を理解すると共に、自ら判断力・意思決定力を持って、家庭生活に必要な仕事を自ら実践する。	4				
5. 基本的生活習慣の形成 身の発達にとって、基本となる生活習慣（身の自立に関わること、対人関係も含めて）を身につけることができる。	5				
6. 家庭生活への関心 家庭生活の重要性を理解すると共に、日々の営みに関心を持つ。自分の暮らしぶりを振り返り、生活課題が発見できる。	6				
7. 家族への理解 ①自分を取り巻く現在の家族の存在、役割、暮らしぶりについて理解できる。 ②将来、家族・家庭の創設者としての役割、暮らし方について考えることができる。	7 ① ②				
8. 生活の原理原則の理解 家庭生活を中心とする生活現象を自然科学的・社会科学的な観点から、総合的・客観的に把握し、その成り立ちや、しくみが理解できる。	8				
9. 健康・安全への関心 生命を維持するために、健康で安全な生活を目指すことができる。	9				
10. 美的処理 生活を科学的に分析・処理する際に、必要な数的要素を理解した上で、使いこなせる	10				
11. 分析的思考 客観的な事実・認識などを、資料などに基づいて順序よく分析・処理していくことができる。物事の結果と原因について考察することができる。	11				
12. 学習態度の向上					

図2 調査2「観点別アンケート」 ワークシート（部分） — 附属高等学校1年生

Ⅳ 結果・考察

1. [調査1] 一年間の学習の振り返り（学びの実態）における自己評価

(1) 自己評価項目の設定

評価項目は、小学校のものを基本として、中・高でその学習内容に応じて、校種における学習者の学びの特徴をいかして作成した。評価項目は前述したように、各学校のカリキュラムが学習者の学びの実態に合っているかを、教師の意図と学習者の評価の合致性から探るために作成されたものである。ここで得た結果をもとに、今後のカリキュラム編成や指導の改善をめざすことになる。そこで、本附属学校では以下のような自己評価項目を設定した。

表2 自己評価項目（校種間の評価関連）

評価項目	小学校	中学校	高校
A. 意欲・関心	・楽しい活動だった。	・自分の考えを述べるなど意欲的に取り組むことができた。	・学習内容に興味を持ち意欲的に学習できた。
B. 自己表現	・自分らしさがでせたと思う。	・計画や実験の工夫をすることができた。	・課題を見つけ自ら解決しようとすることができた。
C. 生活の振り返り	・自分の暮らしぶりを振り返れた。	・課題を見つけ自ら解決しようとすることができた。	・自分の暮らしぶり（生き方）を振り返れた。
D. 学び合い ・協力	・友達や活動や考えが参考になった。 ・みんなで協力して学習できた。	・仲間と協力して学習に取り組めた。	・他の人と協力して学習に取り組むことができた。
E. 知識・技能	・自分の生活に役立つと思う。	・学習内容が理解できた。	・学習内容を理解できた。
F. 有用感		・学習したことを実生活に生かそうとすることができた。	・学習したことを実生活に生かそうとすることができた。 ・将来の自分の生き方や社会との共生について考えることができた。
G. 実生活への 応用（記述）	・学習を通して自分なりに課題で工夫したことや改善したこと	・学習を通して自分なりに家庭で工夫したことや改善したこと。	・学習を通して自分なりに家庭で工夫・実験したことや自己改善したこと

《小学校》では、体験的な活動を通して「できる」喜びを味わったり、暮らしを見つめながら家族の一員としての自分に気付くことを大切にしている。ひとり実習の場面を設定して個の学習を保障し学習に責任を持たせたり、友達同士で教え合いながら学習課題にせまるといった取り組みがそれらの学びを支えている。そして、学んだことを自分や家族のために実践したり暮らしの中に積極的に取り入れながら、自分なりに生活を創意工夫しようとする学習者像をめざしていることから、表2（小学校）のような自己評価項目を設定した。

《中学校》では、体験的な学習を通して子ども自らが気付き、主体的に学ぼうとする意欲を持つことが大切であると考えている。学習課題を設定し、その課題を解決するために自らが計画的に学習を進めていけるような学びを取り入れた。その中で基礎的・基本的な知識や技能を習得し、また同じ学習課題を持つ仲間とともに考え学習していくことで、多様な視点で物事を捉えることができるようになる。このような学びを通して、家庭や社会の一員として自分なり

《高等学校》では、小・中学校で学習・体験してきたことをさらに科学的に分析したり認識したりすることを大切にしている。科学的な原理や社会的な知識を理解した上で、なおかつ生徒自身が興味・関心の高い学習課題に積極的に取り組もうとする。そこでの学びから再度自分の暮らしぶり（生き方）を振り返ったり、自分なりに生活様式や生活文化を創造しようとするのが大切であると考え。この時、他者や社会との共生をはかろうとすることを忘れてはならない。よって、高等学校では自己の確立だけを重視するのではなく、広い視野にたって他を見つめ、社会と共生できる力へとつなげていける学習者像をめざしていることから、表2（高等学校）のような自己評価項目を設定した。

下の表のタテ軸は評価項目を、ヨコ軸は学習内容（単元名）を表している。まず、『わたしと衣生活』という単元について、「1. 自分の考えを述べるなど意欲的に取り組むことができたかどうか」を〔◎・・・よく当てはまる、○・・・だいたい当てはまる、△・・・あまり当てはまらない〕の3段階で評価する。その結果、この単元についての「1」の評価項目は58%の子どもが「だいたい当てはまる」と答えたことがわかる。このような結果を学年ごとに集計し、本附属学校がそれぞれ学年ごとの「一年間の学習の振り返り」としてまとめた。

表3 「一年間の学習の振り返り」～京都中学校3年生～

(◎・・・よく当てはまる, ○・・・だいたい当てはまる, △・・・あまり当てはまらない)

		育 児 期							学 校 期										
		<被 服 領 域>							<保 育 領 域>										
学年	事 項	<わたしたちと衣生活>			<日常着の製作>				<わたしたちとこども>		<幼児の心身の発達>		<幼児の生活>		<子どもを取り巻く環境>				
		わたしたちと被服	被服のはたらき	製作と計画	構成と図紙	材料と用具	裁断印付け	縫合	仕上げ	わたしてだれ	人としての成長発達	幼児の発達の特徴	幼児の体と心	幼児と遊び		幼児と教師			
1	自分の考えを述べるなど、意欲的に取り組むことができた	25 %	58 %	17 %	42 %	42 %	16 %	45 %	38 %	17 %	22 %	48 %	30 %	18 %	74 %	8 %	46 %	44 %	10 %
2	課題を見つて、自ら解決しようとする事ができた	17 %	52 %	31 %	37 %	43 %	20 %	22 %	57 %	21 %	22 %	56 %	22 %	26 %	60 %	14 %	30 %	60 %	10 %
3	計画や実践の工夫をすることができた	16 %	59 %	25 %	39 %	39 %	22 %	38 %	41 %	21 %	12 %	65 %	23 %	4 %	66 %	30 %	35 %	44 %	21 %
4	巧みな作業や操作ができた	36 %	46 %	18 %	33 %	46 %	21 %	38 %	28 %	34 %	12 %	69 %	29 %	7 %	63 %	30 %	26 %	30 %	44 %
5	学習内容が理解できた	48 %	48 %	4 %	52 %	43 %	5 %	41 %	55 %	4 %	26 %	70 %	4 %	29 %	68 %	3 %	41 %	56 %	3 %
6	仲間と協力して学習に取り組めた	38 %	59 %	3 %	61 %	36 %	3 %	62 %	34 %	2 %	33 %	59 %	8 %	17 %	78 %	5 %	44 %	52 %	4 %
7	学習だけでなく、実生活にいかそうとすることができた	26 %	41 %	33 %	14 %	64 %	22 %	14 %	62 %	24 %	22 %	66 %	22 %	37 %	30 %	33 %	22 %	59 %	19 %
8	学習を通して、自分なりに家庭で工夫したことや、改善したことがあれば書いて下さい。																		

(2) 各学校における評価の実態と分析

1) 附属京都小学校

京都小学校では、生活体験に個人差があることや、意欲はあっても生活体験が乏しい子ども、自分の思いがもてない子どもなど、様々な子どもがいる中で「自分なりの生活のしかたを創造する子ども」を目指してカリキュラムを組んできた。具体的には、「自分でできる」という実感を味わったり、自分の思いを工夫して何かを学習することで充実感や期待感をもたせることに重点をおき授業実践を行った。

① 取り組みと成果

5年生の学習では、自分で工夫する楽しさや喜びを味わうために「卵料理」、「野菜料理」、「オリジナル料理」を題材として配列した。どの題材にも一人実習の場面を取り入れて、個の学習を保証してきた。子どもたちは、この学習を「楽しい」と評価している。「楽しさ」は、教師が意図した「自分らしさが出せること」に加えて、「他の友達の活動や考えに触れることの楽しみ」をみいだしていた。また、「そうじ名人をめざそう」、「ミシンになれよう」、「季節のテーブルをつくろう」では、「楽しい」と感じる評価は低かったものの、学習の有用性を感じている子どもたちが多かった。

6年生の学習では、自分なりの生活のしかたに結びつくよう自分の家庭の身近な事象をじっくり見つめることから学習を始め、自分の家庭に生かせるような工夫に結びつくよう学習を進めてきた。また、「家族のみんな元気ですか」や「わが家の味を伝えよう」、「家族の人に贈り物を作ろう」など、「家族」や「家庭」に目を向けた題材を取り扱ってきた。子どもたちの評価を見ると、自分の暮らしに生かしたことについては楽しいと感じていたり、家庭実践で自分と家族との結び付きを感じたり、自分にできることを生かして他に働きかけたりする子どもが育っていると言える。

5年生でも6年生でも、自分の思った通りの成果が得られた学習や初めて体験したことについては楽しいと感じている。また、自分の暮らしぶりを振り返るといふことの意味付けが、6年生になるにつれてなされてきている。そして、個別の追究や、オリジナル活動が続けていくことによって、自分らしさが出せることに楽しさを見出せるようになると考えられる。

② 今後の課題

総体的には、教師のねらいと子どもの評価が大きく食い違うところは見当たらず、全ての学習が自分の生活には役立つと捉えている子どもが多かった。「楽しい」と子どもたちが感じる学習は、自分にできるという自信や家庭で生かせる喜びに結び付けられるものである。しかし、授業の中には、楽しい学習を求めるよりも家族や家庭をあらためて子どもたちに意識させることを意図するものもある。このような学習においては、ねらいをしっかりとって、子どもたちに印象付けていくことが必要であるとともに、つぎに行う具体的な学習への意欲づけを行っていく必要がある。

今後は、子どもたちが楽しいと感じる学習につながる工夫はもとより、こういった自分と家族との関わりや家庭との関わりなどへの関心を高められるような授業の工夫が必要だと考えられる。

2) 附属桃山小学校

小学校の子どもたちは、色々なものを食べたりすると、「おいしい、どうやって作ったの」、「作り方教えて」と言ってメモを取り始める。作り方が分かれば、日曜日などに家族と一緒に作ったり、自分で作って家族と一緒にふれあいのひとときを持つことができる。作ることに関心を持って取り組む姿が見られる。しかし、子どもたちの家庭での生活経験が乏しく、簡単なことでも手順を押さえることができない。家庭で習うことも少ない。そこで子どもたちが主体的に取り組むことや、自分の生活を豊かにする「生きる力」をつけることをねらいとした。

① 取り組みと成果

子どもたちが楽しいと感じる学習は、5年生では、「卵の調理をしよう」、「小物を作ろう」、「ミシンぬいをしよう」である。6年生では、「ジャガイモの調理をしよう」、「おいしいご飯とみそ汁を作ろう」、「献立に加工食品を加えて」、「会食とサンドイッチ」などの食物単元の学習に楽しみを見つけている。5年生も6年生も食物単元は実際に自分で調理して食べることから、楽しく取り組んでいる。調理したり物を作ったりする過程で作る喜びと友達とのふれあいが楽しく、良い思い出となって残っているためである。また、それ以上に出来上がったものを食べられることは、成長期の子どもたちの食欲を満足させるものであることに起因している。

被服領域では、5年生の「小物を作ろう」と「お気に入りの袋を作ろう」が子どもたちにとって楽しい学習であったようだ。5年生では、自分の裁縫箱を持てたことと、自分の考えで計画的に仕事を進めたことが楽しい学習につながった。これまで、遊びや図工の時間に作った工作では、紙をはさみで切ったりしたが、布をはさみで切ることは少なかったようだ。布という素材に触れたりその布をはさみで切れる緊張感や嬉しさがあり、楽しい学習につながっている。また、出来上がった作品を鑑賞したり、その布で作った作品を生活の中で使ったり、生活の中で役立たせるなど、楽しみが大きいと思われる。6年生の「夢のあるエプロンを作ろう」では自分の体に合わせて型紙を作り、好きな布を自分で用意して作るものである。ミシンの使い方や縫い方などで分からないときには、友達同士の教え合いやエプロンの段階見本などを見て自分で学ぶ学習を進めてきた。学校での時間をかけての作品作りから、作ることに自信をつけて家庭でも生活に役立つ便利な物を工夫して作れるようになって欲しいと願っている。

この他の「私の仕事と家族の仕事」、「臨海に持っていく服」など、家族の領域や住まいの領域については、長期的な学習の目標を持って、具体的なものをあげながら励ましていきたい。

② 今後の課題

学習の内容はおおむね理解できていると思うが、「生きる力」となる実践的な体験を身につけていかねばならない。これからの社会環境や家庭生活の変化は便利なものが多くなり、子どもたちの出番を必要としなくなってきたが、生活に対して受動的にならないように、子どもたちの本来持っている実践的な動きや主体的な姿を励ましていきたい。

3) 附属京都中学校

附属京都中学校の生徒は、作業や実習・実験など、自らが主体的に活動する実感を得やすい学習には特に意欲を持って取り組む。また、話し合い活動を取り入れた学習場面においても、個々が自由にそれぞれの意見を発言し合える雰囲気がある。しかし、実際の家庭生活の場面では「～してもらおう」的立場に立っている生徒がほとんどであり、よりよい家庭生活を作り上げ

ていくための課題を見つけ、その課題解決策を見出そうとする力は乏しいと言える。そこで家庭科では、学習課題を自分のものとして置き換え、家庭生活の中で自分ができることややりたいことを積極的に取り入れる姿勢、および先の見通しを持って計画的に物事を進めていくことができる力の育成を目指してきた。

① 取り組みと成果

生徒達は、個々に思いや願いが異なっていて、興味・関心・意欲や発想の仕方が違っているのと同様にそれぞれの良さや可能性をも秘めている。そして、生徒達が自分の良さや可能性を意欲的に発揮するのは、経験したことや学んだこととの関わりが深く、自分の実現したいことの意図を発見できた場面であると考えられることから、授業の構築・展開において次のような工夫に取り組んだ。

- ・個々に課題意識を持って授業に臨むための動機付け
(授業内容に関する新聞のスクラップや聞き取り調査などの事前の情報収集)
- ・学習課題を多面的な視点で探求する場面の設定
(グループディスカッションやグループ学習)
- ・個人で思考・判断・選択・実行する場面の設定
(グループ⇒個人による企画→計画→実行→評価へ)
- ・学習段階における振り返りの場面の設定
(自己評価・相互評価・アドバイス用紙の活用)

以上のように、小学校で体験した実習や実験を基盤にして、他者の意見を取り入れたり多様な視点に立ちながら自分の考えを構成し、発表できる場面を増やすことで、自らの実生活への課題意識が高まったとする生徒が増えたこと(アンケート調査より)は概ね成果を得たといえる。

② 今後の課題

多岐にわたる学習内容と限られた学習時間との絡みの中、どうしてもより多くの生徒達に一定の到達点を求める授業をしてしまいがちである。しかし、様々な考え方を持つ個に応じるためには、それぞれの生徒達の課題意識が連動的に学習の意欲につながるような題材の配列を工夫し、最終的にはその題材が大きな学習活動の流れになるように構成されるべきである。さらにその流れは、小学校で家庭科を学んだ子ども達を受けて、中学校三年間でつけたい力を見極めたものであることが必要である。個々の生徒達の豊かな発想を有効に取り入れる場面を増やし、学習過程において生徒達が自分の良さを発見し、それを生かしてよりよい工夫をしたいという意欲を喚起することによってこそ、本来家庭科が目指す主体的な態度は育成される。今後、指導者側の支援として、生徒達の意欲的な活動場面を設定することだけでなく、その場面でより主体的に個々が課題追求していくための支援方法の研究を継続していく必要がある。

4) 附属桃山中学校

附属桃山中学校では、生活者としての基本的な知識や技能の習得が十分ではなく、また学習や活動を行うときに、時間的及び内容的に見通しを持った行動がしにくい生徒がいる。また主体的に学習に取り組もうとする意欲を持つ生徒がいる半面、何事にも他者へ依存する傾向にある生徒もいる。このような生徒の実態から本校家庭科では、「日常生活をしっかりと見つめ、その中の問題に気づき自分なりに生活を改善しようとする」こと、また「日頃当たり前だと思っ

ていたことや疑問に思っていたことを、自らが積極的に検証したり、他者に働きかけて調査しようとする」こと、そして単一的な考え方をせず、「学ぶ視点を動かしながら、多面的に物事を捉えようとする」ことをねらいとして授業実践を行った。

① 取り組みと成果

生徒達が興味を持って意欲的に取り組む学習とは、実践的・体験的な活動を伴うもので、中でも自分や家族の生活にとって身近な題材であること、生徒達が主体的に学びを深めていける学習内容であること、調理実習や実験・ロールプレイングなど学習方法が多様であること、学習したことが家庭でも実践可能であることなどの要素を含んだ学習であるといえることができる。1年生の「消費者を取り巻く問題」では、主に悪質商法の実態を知り被害に合わないためにはどのようなことに気をつけなければならないかを考えるためにロールプレイングを取り入れた。悪質商法は、中学生自身が被害者となるケースが増えていたり家庭でも起こりやすい問題であることから、題材に対する興味・関心が高く、またロールプレイングという学習方法を取り入れたことで生徒同士の学び合いが可能となった。2年生の「食生活と消費者」ではおもに加工食品の選択と購入について日常生活の中で、また授業の中でわきあがってきた疑問を自らの学習課題として設定し、共通の課題を持つ仲間と話し合いながら実験・実習・調査などを行い、再度個人レベルで学習課題に向き合う展開とした。自分で学習課題を設定し自分達で計画的に学習を進めていかなければならないことに責任の重大さは感じるものの、学ぶ意欲や充実感は、普段の学習以上のものであった。3年生の「幼児の生活」では、5年ほど前から幼稚園訪問を行っているが、教科書で学習するよりも実際に幼児の生活「遊び」に触れたほうが学習内容が理解できるばかりか、人との接し方を学んだり自分自身の生き方について見つめなおすことができるといった意見が多かった。

② 今後の課題

生徒の興味・関心が低い学習とは、教師主導型の学習や学んだことが実生活に生かしくい学習であるといえることができる。教師主導型の学習では、知識理解に重点をおいたり学習方法も画一的であったりする。全員が、必要な学習内容を、正確にしっかり学べるという利点はあるものの学習後の充実感はあまり感じられないだろう。「私達と家庭生活」や「中学生の健康と栄養」の単元では特に教師主導型となってしまう生徒の関心は低かった。また「よりよい暮らしをめざして」では環境問題に取り組んだが、自分達の思いが即、社会に受け入れられないことが自己評価の低さにつながったものと思われる。家族の一員として、また社会の一員としての自分に気づくと共に、中学生の自分に今何ができるのか、将来を見通してどのように考えていかなければならないのかを意識しながら学習課題に取り組めるように、今後も支援していきたい。

5) 附属高等学校

附属高等学校の生徒は、ほとんどが生活に対して受動的で親任せであるために自立心が乏しく、生活への実感が薄いために疑問や課題が持てない。また、自己中心的で視野の狭い考え方の生徒もいる。このような分析から家庭科では「より幅広い情報を受け入れ、情報交換することで、今の自己のあり方・家族のあり方を見直し、評価できる部分・問題点・改善方法を知ることによって、将来の自己の生き方や社会との共生を考えることができる」ことを目指してき

た。

① 取り組みと成果

生徒がより興味を持って学習した内容に、「調理実習」、「被服実習」、「食品添加物」、「食中毒」、「既製服の選択」、「被服管理」、「生活時間」、「支出（経済）」、「合理的な消費生活」、「胎児や乳児の発達」などがあげられる。「実習」は座学にはない自由さと作品の完成による充実感や試食の満足感が得られ、どの校種においても人気のあるものである。高等学校では計画力や想像力、応用力などに配慮した授業を展開し、それらの力を実生活に結び付けて欲しいと考えている。それ以外の内容においても、より身近な話題を取り上げたり常に自分の生活を振り返らせたりして興味を持たせている。既製服の選択・生活時間・支出・消費生活は、自分自身を調査し分析することで、自分のあり方を再認識したり改善したりすることができた。

また、上記の学習内容に加えて、授業への興味や意欲にはやや欠けていたが、「栄養のバランス」、「家族」、「職業労働（女性問題を含む）と家事労働」、「子どもと家庭・社会」など、歴史的背景から振り返り、現状とその問題を取り上げることで現在または将来において生活に役立つといった有用性を感じているようである。生活を快適に、健康で豊かにしなければならないと感じると同時に、人命や子どもの権利への関心も強い。

このように、興味や有用性を感じた学習に関しては、自己の生活を見直し改善したり、当たり前のように家族のために労働をしてくれている親に感謝し手伝いをするようになったりする生徒も少なくはない。その中でも、授業のあった日にはその内容について家族と話し合う生徒もいた。家族との会話が希薄になっていく年頃に、学習内容を話題として家族とコミュニケーションを図れることは素晴らしいと思う。

② 今後の課題

学習内容は概ね理解できているようであるが、全ての学習に対して自己を振り返れているとはいえない。身近な暮らし振り返りを振り返ることは簡単だが、先にも述べたように生活実感の薄い生徒や「社会保障」、「高齢者問題」、「妊娠」などとなると現在の自分と関わりがない内容として捉え、振り返ることができない。ましてや、家庭科を受け入れようとしなない生徒にとっては現在をも振り返れない。さらに、「課題を見つけて自ら解決しようとする意欲」や「学習を実生活に生かそうとする意識」にまで発展していない生徒も多いが、「将来の生活・共生へと結びつける意識」となると全般的に乏しくなる。特に、社会や組織集団の中で自分がどうあるべきかを考え、家庭科を家庭生活のみではなく社会問題として発展させるまでには至らなかった。

これらの課題を解決するためにはもっと疑問を投げかけ、興味を持たせて自ら解決したいという探求心を持たせるような授業を展開しなければならないであろう。

(3) 評価結果の小・中・高における比較検討

《小学校》では、実際に何かを作ってみるとか、作品ができたと実感できる学習に対して楽しさを感じていることが分かった。自分の力で作品を完成させたり、目標を達成したことが学ぶ喜びにつながっているようである。また、学習を重ねるほどに、自分の生活に役立つものを作りたいと思うようになったり、それを家庭でも家族のために実践したいと思うようになったりする。家庭科の学習を通して家族の一員としての自分に気づき、そこで自分の役割を実感し

ている時期ではないだろうか。また、学習方法についても個の学習から仲間との共同学習へと徐々に広がりを見せている。これは、個の学習によって自分らしさを出すことよりも、共同学習によって他の友達の活動や考えに触れることに楽しさを見出しているということである。相互評価をしたり、他の工夫や考えを聞き合う「学び合う場面の設定」が求められていると考えられる。

《中学校》では、体験的な活動をとまなう学習に対して、意欲的に取り組むことができたという点、自分達で計画を立て実践できるという点、仲間と協力して取り組めるという点、学習によって自分の生活を振り返ったり、家庭生活に生かすことができるという点が高い評価につながっているものと思われる。小学校との大きな違いは、第一に学習課題の設定が生徒自身によってなされるということである。小学校では、基礎・基本を重視する意味から学習課題は同じで、それをどのように学んだかというところに子どもの創意工夫が見られる。一方、中学校では、学べきものは同じであっても、生徒の興味・関心によって学び方の視点や方法が異なる。また第二に、学習者の視点の違いが挙げられる。小学校では、家族の一員としての自分という視点であったものが、中学生になると、さらにその上に地域や社会の一員としての自分というように視点が広がる。地域や社会の中で、中学生は何をすべきかというように、社会との共生に気づき始める時期ではないだろうか。よって、生徒が創意工夫して学びを深めていけるような生活に根ざした「学習課題の設定」が求められていると考える。

《高等学校》では、科学的な分析や認識、客観的・総合的な捉え方が重視されるため、座学中心の授業形態になりがちであるが、その中でも仲間と協力しながら自由にのびのびと動き回れる実習授業に対して、意欲的に取り組むことができたという点が高い評価されている。また、自分の生活に即、生かすことができる授業に対して、興味・関心が高いことが分かった。しかし、教師の意図していたことと学習者の学びの実態には大きなずれがある。これは高等学校では、小・中学校とは違い、単に意欲を持って学習を進めるのではなく、全ての学習内容に対して科学的・社会的な知識・原理を理解した上で、自分の暮らしぶりや将来の生き方にまで考えを発展させていかなければならないからである。また、社会や組織集団の中で自分がどうあるべきかを考えていく側面も必要とされる。このように、目指すべき学習者像と生徒の実態を比較すると、現行のカリキュラムを継続することには問題があるように思われる。一つは時間の不足が挙げられる。全ての学習内容に取り組むと時間が不足し、授業の中に生徒が「考える」場面を設定することができない。二つ目は、生徒の生き方や将来設計にあった題材の提供ができていないことが挙げられる。自分の生き方に深くかかわるものであると実感できてこそ、学習の有用性を感じることができるのである。よって、小・中・高を通した学習内容の厳選と一貫性のある家庭科カリキュラムの編成が強く求められていることを再認識する。

2. 【調査2】「目標の観点」（育てたい力）に基づく自己評価

(1) 自己評価項目の設定

ここでは、「目標の観点」に基づく自己評価項目の設定について述べる。

表4・表5・表6は、それぞれ小学校、中学校、高等学校の自己評価項目である。これらの自己評価項目は、児童・生徒が自分の学びを振り返ることができるように、具体的な場面や行動を例に挙げるなど、目標の観点の項目をわかりやすい言葉に置き換えた。また、同じ項目に

においても、小学校レベル・中学校レベル・高等学校レベルによって学びの特徴が異なるため、それぞれのレベルに応じた項目の文章を作成した。例えば、「生活者としての個の確立」の中の「自己尊重」という目標の観点の観点を例に挙げてみる。小・中学校レベルでは、「自分の考えを大切に、自信を持って行動している。」という言葉に置き換えた。高等学校では、小・中学校レベルでの言葉に加え、「自分らしさに気づき、自分の力で考えて自らの意見を確立し自信を持って表現できる。」とし、各学校レベルの学びに応じたものとした。また、高等学校レベルでは、今現在の生活のあり方だけを見るのではなく、近い将来において家庭の創設者となる立場としての理解も必要だと考えているため、「家族への理解」の項目を、現時点における家族への理解に関する項目と家庭の創設者としての理解という二つに分けて評価させた。

実施方法は、1年間の最終の時期に、各学校の各学級ごとに行った。児童・生徒が項目の意味を理解し、正確に自己評価できるように、教師が補足説明を加えながら自己評価させた。自己評価は、各自の学びを振り返らせながら、「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の4段階で評価させた。

(2) 小学校レベルにおける評価の実態

まず、小学校レベルにおける自己評価の実態について述べる。また学年による違いについてもあわせて考察する。

図3は、京都地区・桃山地区を合わせた5年生と6年生の自己評価の実態である。図中の目標の観点の該当番号は、表4の小学校の項目の設問内容に相当する観点番号である。小学校においては、多くの項目で6年生の自己評価が5年生より高い数値を示している。このことから、

表4 自己評価項目（小学校）

小中高 共通番号	目標の観点(育てたい力)	観点 番号	設 問
1	の生活者としての個	1	わたしは、自分の考えを大切に、自信をもって行動している。
2	自己尊重	2	わたしは自分が今何をすべきか、何をすべきでないかを判断することができるほうだ。
3	判断力	3	いろいろなことを考えた上で自分の考えにもとづいて何かを選んだり決めたりすることができる。
4	意思決定	4	家庭の中で必要な仕事を自分からすすんでするほうだ。
5	実行力	5	身の回りの基本となる生活習慣について自分のことは自分でできる。
6	基本的な生活習慣の形成	6	自分のくらしを振り返り、生活の中から課題を見つづけることができる。
7	家庭生活への関心	7	自分の家族がそれぞれどんな役割を果たしているか理解している。
8	家族への理解	8	食事が人間にとって、どのように大切なものであるか説明できる。
9	生活の原理原則の理解	9	季節によって、どんな衣服が快適か説明できる。
10	健康・安全への配慮	10	快適に住まうための工夫を見つけることができる。
11	数的処理	11	健康で安全な家庭生活を心がけている。
12	分析的思考	12	調理するときには人数分の分量を計算したり、計量できる。また、布で物を作るときの布の分量を算出できる。
13	情報獲得	13	資料などで、知ったことを実生活に結びつけて考えることができる。
14	生活技術・技能の獲得	14	自分でやったことが成功したか失敗したか、またその原因がいつもよくわかっている。
15	コミュニケーション	15	わからないことがあるときは、本で調べたり、人に聞いたりして情報を集められる。
16	相互理解	16	家庭生活の中で自分でできるようになったことをとどんどん生かしている。
17	家族の一員としての素養	17	意見を交流させて、他の人と交わることができる。
18	社会の一員としての素養	18	友達の考え方や意見を聞いたり、自分の考えや意見を聞いてもらうことは大切だと思う。
19	生活の美・芸術	19	家族のみんなに対して思いやりの心をもち、すすんで自分の役割を果たすことができる。
20	生活の美・芸術	20	自分の生活が快適であることも大切であるが、社会の一員としての自覚をもって責任ある行動ができる。
21	生活の美・芸術	21	家庭生活に美しいものを取り入れ、創意工夫することで生活を豊かにしようと心がけている。
22	生活の美・芸術	22	どういう状態が快適であるか理解し、少しでも自分が気持ちよく過ごせるように心がけている。
23	生活の美・芸術	23	自分の心がやすらぐので、思いやりややさしい心で他に接するようにしている。
24	生活の美・芸術	24	古くから伝わってきた暮らしの工夫は、これからも大切にしたい。
25	生活の美・芸術	25	生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わうことができると思う。
26	生活の美・芸術	26	自分達の身の回りで気がついたことから、あらためるように努力している。
27	生活の美・芸術	27	自分のとった手段がどのような結果につながるのか予測がつく。
28	生活の美・芸術	28	自分の思いを実現するために、全体の見直しをもつことができる。
29	生活の美・芸術	29	自分は何でもだんまりより行動できる方だと思う。

学習を積み上げることによって自信に結びついていると考えられる。

最も自己評価の高い項目は、「18相互理解」で、他の項目より際だっている。このことから、授業の中で常に学び合いを大切にし、そこから自分の新たな学びに結びつけていくような積み重ねができていないのではないかと考えられる。

次に自己評価の高い項目は、「15情報獲得」である。このことから、課題を追究していくための方法を見つけ、自分で情報を集めていく学習を積み重ねていることの有効性が伺える。

表5 自己評価項目（中学校）

小中高 共通番号	目標の観点(育てたい力)	観点 番号	設 問
1	自己尊重	1	自分の考えを大切にし、自信を持って行動している。
2	判断力	2	自分の置かれている立場や状況を踏まえて判断することができる。
3	意思決定	3	いろいろな視点から考えた上で、自分の考えに基づいて選択したり決定したりすることができる。
4	実行力	4	家庭の中で、必要な仕事の重要性を理解し、自分から進んで実践できる。
5	基本的な生活習慣の形成	5	身の回りの基本的な生活習慣(身辺自立)に関わること、対人関係も含めてを身につけることができる。
6	家庭生活への関心	6	自分の身の回り、および自分の暮らしを振り返り、生活の中から課題を見つけることができる。
7	家族への理解	7	自分を取り巻く家族の存在、役割、暮らし方について理解している。
8	生活の原理原則の理解	8	家庭生活を中心とする生活事象(衣・食・住生活)について、その成り立ちやしくみを科学的に理解している。
9	健康・安全への配慮	9	健康で安全な生活を心がけている。
10	数的処理	10	家庭生活において、必要に応じて数的処理ができる。
11	分析的思考	11	資料などで知ったことを家庭生活に結びつけて考え、結果と原因について考察することができる。
12	情報獲得	12	わからないことがあるときは、本で調べたり、人に聞いたりして、積極的に情報を集めることができる。
13	生活技術・技能の獲得	13	生活技術の持っている意味を理解するとともに、家庭生活の中で自分が身につけた技術や技能を積極的に生かしている。
14	コミュニケーション	14	意見を交流させて、他の人と意思疎通を図ることができる。
15	相互理解	15	友達の間で考え方や意見を聞いたり、自分の考えや意見を聞いてもらうことは大切だと思う。
16	家族の一員としての素養	16	家族のみんなに対して思いやりの心を持ち、進んで自分の役割を果たすことができる。
17	社会の一員としての素養	17	社会を構成するメンバーの一員として、権利と義務の意味を知って、責任ある行動ができる。
18	生活の美・芸術	18	家庭生活に美や芸術を取り入れ、創意工夫することで生活を豊かにしようとしている。
19	快適性を追求する力	19	どのような状態が快適であるかを理解し、その快適性を維持しようとしている。
20	他者への思いやり・愛情	20	思いやりや優しい心で他人に接するようにしている。
21	伝統・文化の理解	21	古くから伝わってきた暮らしの工夫や生活様式を理解し、これからも大切にしたいと思う。
22	生活様式の創造	22	生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造することができる。
23	環境醸成	23	望ましい環境を創造していくために、問題を見つけ、自分たちを取り巻く環境に働きかけをすることができる。
24	予測力	24	自分のとった手段がどのような結果につながるのか予測できる。
25	構想力	25	よりよい生活を実現するために、見通しをもってその方策を考えることができる。
26	マネージメント力	26	生活(自分で考えたり計画したりしたこと)を後取りよく進めていくことができる。

表6 自己評価項目（高等学校）

小中高 共通番号	目標の観点(育てたい力)	観点 番号	設 問
1	自己尊重	1	自分らしさに気づき、自分を大切にし、自分の力で考えて自らの意見を確立し、自信を持って表現できる。
2	判断力	2	自分の置かれている立場や状況を見極め、判断することができる。
3	意思決定	3	いくつかの選択の可能性の中から、自らの価値観に基づいて自己決定できる。
4	実行力	4	生活に必要な仕事の重要性を理解すると共に、自らの判断力・意思決定力を持って、家庭生活に必要な仕事を自ら実践する。
5	基本的な生活習慣の形成	5	身の発達によって、基本となる生活習慣(身辺自立)に関わること、対人関係も含めてを身につけることができる。
6	家庭生活への関心	6	家庭生活の重要性を理解すると共に、日々の営みに関心を持つ。自分の暮らしを振り返り、生活の中から課題を見つけることができる。
7	家族への理解	7	自分を取り巻く家族の存在、役割、暮らし方について理解できる。
8	生活の原理原則の理解	8	家庭の創設者としての役割の必要性を理解する。
9	健康・安全への配慮	9	家庭生活を中心とする生活事象を自然科学的・社会科学的な観点から、総合的・客観的に把握し、その成り立ちや、しくみが理解できる。
10	数的処理	10	生命を維持するために、健康で安全な生活を目標とすることができる。
11	分析的思考	11	生活を科学的に分析し、処理する際に、必要な数値要素を理解した上で、使いこなせる。
12	情報獲得	12	客観的な事実・認識などを、資料などに基づいて順序よく分析・処理していくことができる。物事の結果と原因について考察することができる。
13	生活技術・技能の獲得	13	客観的な情報を収集することができる。
14	コミュニケーション	14	生活技術の持っている意味を理解すると共に、それらを身につけて生活に生かすことができる。
15	相互理解	15	様々な立場の人と意思疎通をはかり、交流することができる。
16	家族の一員としての素養	16	様々な立場の人と意見交換をして、お互いが幸せになるために理解し合う大切さを認識できる。
17	社会の一員としての素養	17	家族を構成する一員として、思いやりと役割を認識して行動できる。
18	生活の美・芸術	18	社会を構成するメンバーの一員として、権利と義務の意味を知って、責任ある行動ができる。
19	快適性を追求する力	19	美や芸術が生活を豊かにすることを理解すると共に、創意工夫して生活に生かすことができる。
20	他者への思いやり・愛情	20	どのような状態が快適であるかを理解すると共に、持続的な快適性を維持できる。
21	伝統・文化の理解	21	心の快適性を求め、共感や愛情を持って他者に接することができる。
22	生活様式の創造	22	生活文化・伝統などに対する理解を深め、これらも大切にしたい。
23	環境醸成	23	生活を創意工夫することを通して、楽しさを味わったり、生活のスタイルを創造することができる。
24	予測力	24	現在の生活環境の問題を把握すると共に、望ましい環境を創造していくために環境への働きかけをすることができる。
25	構想力	25	生活を維持・創造するための手段が及ぼす影響を予測することができる。
26	マネージメント力	26	めざす生活像を実現していく方策を構想し、見通すことができる。
		27	生活を円滑に運営していくことができる。

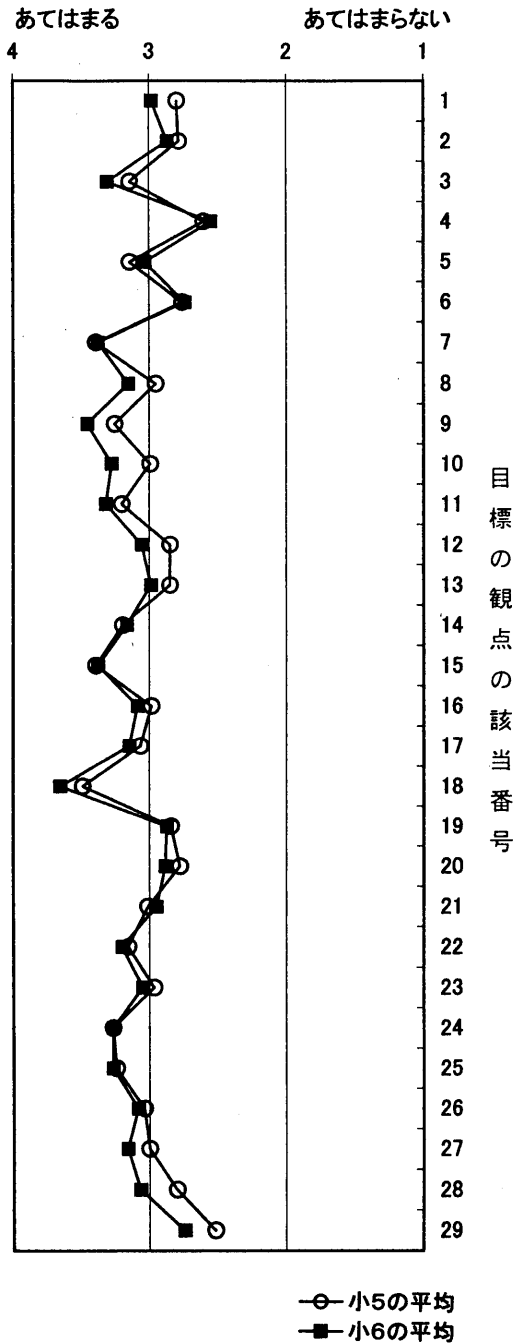


図3 目標の観点に基づく自己評価（小学校）

また、「7 家族への理解」も、5年生・6年生共に高い数値の結果が出ている。これは、自分と家族との関わりを見つめ、その中で自分にできることを考えていくような学習を積み重ねてきたことの現れだと考えられる。

一方、5年生・6年生とも共通して自己評価の低かったものは、「4 実行力」や「6 家庭生活への関心」、「20社会の一員としての素養」や「29マネージメント力」などである。これらの項目は、どれも実践的に行動するものである。授業の中で、家庭実践に結びつくような手だてをうってはいるものの、このような結果が出ていることは、子どもの現実の生活状況がどのようなものかをさらに把握し、各家庭の意識を高めるためにも、一層家庭との連携をとっていく必要がある。また、学校では、全体の中の部分的なところを学習させていることもある。家庭実践させるとなるとマネージメント力や工夫などにおいて複雑となってくる。このことが、実際の行動に移しにくい原因になるのかもしれない。

(3) 中学校レベルにおける評価の実態

次に、中学校レベルにおける自己評価の実態について述べる。

図4は、京都地区・桃山地区を合わせた中学校1～3年生の自己評価の実態である。図中の目標の観点の該当番号は、表5の中学校の項目の設問内容に相当する観点番号である。

中学校においては、全体的には各学年を通じて同じようなプロフィールが描かれている。その中で、3学年とも顕著に高い数値になっているのは、「15相互理解」という項目であった。このことから、学習形態の中で、ディベートや班討議な

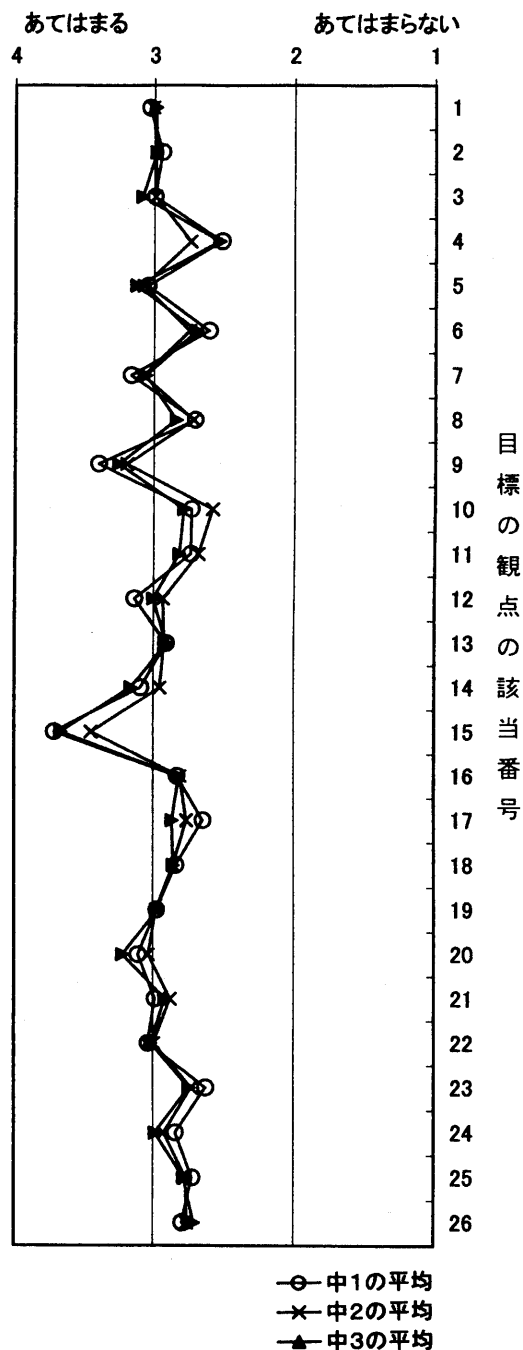


図4 目標の観点に基づく自己評価（中学校）

どの話し合い活動を多く取り入れながら学習を進めたことの有効性がわかる。自分と違った考え方や意見を聞く中で、さらに自己の学びが広がると実感した生徒も多いと思われる。

また、学年が上がるごとに高い数値結果となっているのは、「24予測力」「17社会の一員としての素養」である。このことから、学年が上がるごとに生活を経営していくための予測力や社会性への目覚めが出てくる傾向にあるということが言える。

(4) 高等学校レベルにおける評価の実態

次に、高等学校レベルにおける自己評価の実態について述べる。結果は、図5のグラフの通りである。図中の目標の観点の該当番号は、表6の高等学校の項目の設問内容に相当する観点番号である。

全体的になだらかなプロフィールとなり評点3の「かなりあてはまる」を越えるものがほとんどなくなっていて、小・中学生より低い評価となっている。このことに関しては、一つの見方として、上級生になるほど周囲の中での自分を客観的に見るができるようになっていことが考えられる。しかし1年生より2年生の方が全般的に評価が高まっている。このことから、学びの積み重ねによる成果は学年間で現れているといえる。

1年生・2年生に共通していえることは、次の2点である。

1点目は、「10健康安全への配慮」「7、8家族への理解」「22伝統文化への理解」「23生活様式の創造」の項目についての自己評価が 高い数値を表している。これらは、ほとんどが「理解できる」や「これからも大切にする」「創造することができる」といった頭で考えたり創造し

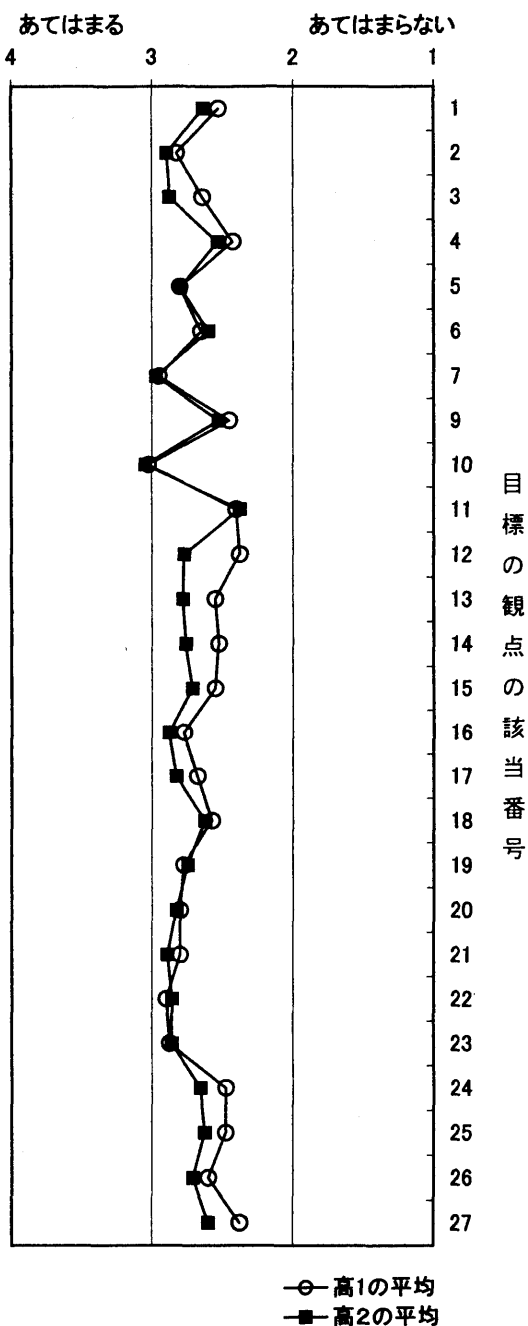


図5 目標の観点に基づく自己評価 (高等学校)

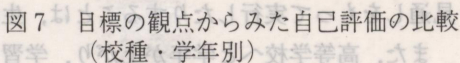
たりする思考型のものや、「これから実行しようと思う」といった希望型のものである。

2点目にいえることは、「4 実行力」「9 生活の原理原則の理解」「11 数的処理」「18 社会の一員としての素養」「24 環境醸成」「25 予想力」「27 マネージメント力」などの項目についての自己評価が低い数値を表していることである。このことから、「自ら実現する」「使いこなせる」「行動ができる」「働きかけることができる」「総合的に把握する」といった実際の行動や生活への実行力が乏しいと考えられる。また、特に1年生であるが、「12 分析的思考」「13 情報獲得」「14 生活技術・技能の獲得」の項目の評価が低い。このことは、受動的な生活の現れとも考えられる。

(5) 男女別の比較について

各校種別に男女の結果を図6に表し比較を行う。目標の観点の該当番号は小・中・高の共通番号のものである。なお、考察にはさらに各校種で見られた学年による差異もあわせて含めている。

小学校においては、多くの項目において、女子が男子よりも高い数値結果となっている。5, 6年生を通じて女子が顕著に男子の数値を上回っているのは、「18 生活の美・芸術」「19 快適性を追求する力」「21 伝統文化の理解」「22 生活様式の創造」の項目であり、「生活に対する感性や創造性」において、女子の方が高まっている傾向にあると言える。一方、5, 6年生共男子の数値が女子を上回っている項目もある。「24 予測力」「25 構想力」「26 マネージメント力」である。このことから、「生活の経営」に対する男子の積極性がうかがえる。



中学校では、多くの項目において、女子が男子よりも高い数値結果となっている。中でも、1年生から3年生を通じて女子が顕著に男子の数値を上回っているのは、「4 実行力」「6 家庭生活への関心」「7 家族への理解」「11 分析的思考」「18 生活の美・芸術」「23 環境醸成」の項目であり、「生活者への個の確立」への意識・関心の高さに男女差があることがわかる。つまり、女子の方が、家族や家庭生活に関しての関心が高く、より快適に生活していくための感性が高まっている傾向にあると言える。一方、3学年のうち、2つ以上の学年において男子の数値が女子を上回っている項目もある。「24 予測力」「25 構想力」「26 マネジメント力」である。このことから、男子においては、「生活の経営」への意識の高さが伺える。

高等学校では、必ずしも多くの項目で女子の自己評価が高いというわけではない。生活の科学性に関する項目では女子より男子の方が多くの項目で高い自己評価をしている。しかもその中でも「9 健康・安全への配慮」は両性とも小・中学校同様に高い評価をしている。女子は、その他に「21 伝統文化への理解」「22 生活様式の創造」「14 コミュニケーション」「17 社会の一員としての素養」への評価が男子より高く、両性の特性の違いが表れているといえる。一方で、1年生女子の「20 他者への思いやり・愛情」の評価が低い。男女共に同年齢外の人間とのコミュニケーションが乏しいことや自己中心的な生活など、世代的な特徴が見られ、このことから、家族・保育の授業の学習時期や内容および方法を考慮する必要がある。

(6) 地区別の比較について

図には示していないが、京都地区と桃山地区の自己評価結果も比較し検討してみた。それによると、桃山地区の方が「他者への思いやり」の項目の数値が高いことがわかった。桃山地区では、小・中ともに、外国人理解を中心に据えた学習から、自国の文化や伝統を思い起こし大切にするような学習を積み重ねており、さらに中学校には生徒数はわずかではあるものの1・2学年に帰国子女学級も設置されている。このような学習の積み重ねの成果や学習環境の違いが地区の特性をつくり、そのことが子どもたちの自己評価にも表れていると考えられる。

(7) 小・中・高を通してみた各学年の比較について

小・中・高の子どもたちの実態を連続して考察するために、小・中・高の各学年を通してみた結果を図7に示す。これを見ると小・中・高と校種が上がるほど低い評価結果となっている項目が多い。これは、単に学習意欲や学習成果の低下を意味するのではなく、学齢が上がるほど自分を客観的に見ることができるようになるという、子どもの発達に関与している結果と考えられる。このように、子どもの評価結果が、そのまま客観的な実態を示しているとは、断言できない事情がある。これらの評価結果の読み取り方について、さらに検討を重ねることが、必要となる。

以上述べたように、数値の読み方には、慎重な検討を要するが、現時点で得られた数値をもとに、特徴的な点について次のようなことがいえる。

「17 社会の一員としての素養」の項目については、小学校では低い数値となっていたが、中学校1年生、2年生を経て中学校3年生になった頃に、意識の高まりが見られる。「26 マネジメント力」については、小・中・高と学習を積み重ねてはいるが、自分で段取りを立てたり見通しをもって実行したりすることは、生活への関わりが少ないため低い結果となっている。

また、高等学校へと学年が上がり、学習を積み重ねることによって理解力は身についていく

が、現実の生活に対しては小学生の方が積極性があるように思われる。学年が上がるにつれ、日常的に生活に触れる機会が少なくなる。その上、家族人数が少く、家族を構成する世代の幅が狭くなっている現状からこのような結果が起こっているのではないかと考えられる。授業において、創造力を促したり、老人・幼児・介護などの現実の身近な例を体験的・実習的に取り上げたりすることも必要である。

V おわりに

我々は2つの自己評価の結果から、今後カリキュラム研究を進めるにあたって次のような課題を見いだすことができた。

まず、各校種に共通して見られた結果から、それぞれの発達段階に応じた学習形態によって、知識や理解の定着が見られるが、まだ自らの生活に働きかける実行力が乏しいことが伺える。しかも、学年が上がるにつれて、その傾向が強く見られることから、知識理解のレベルから生活者としての思考の深まりのレベルへと導いていくプロセスを見いださなければならない。

次に、学習者相互の理解や家族への思いやりといった面では、成果が見られるが、社会の一員としての素養や環境醸成といった社会との共生を意識した生活者としての自覚がまだ薄いように思われる。複雑化する社会の中で、学習者は、このような生活者としての自覚を、ますます要求されるのである。この課題については、他教科・総合的な学習との関連を踏まえて改善していかなくてはならない。

さらに、小学校から高等学校まで、男女が共通の内容を共修しているが、年齢が上がるにつれて、男女間で、学びの実態にも差異がみられた。男女の特性を生かしながらも、違いを認めながら、共生していくことの大切さを学び取らせることが重要である。

このように、学習者による自己評価によって、カリキュラムの妥当性を検証し、我々が設けた目標の観点に到達できるかをチェックすることができるのである。

このようにして分析された結果は、次年度のカリキュラム作成時の手がかりとすることができるのである。今後、カリキュラム研究を進めるにあたっては、このような自己評価が重要な意義をもつことを確認することができた。自己評価の方法についても、まだ検討の余地がある。そしてさらに多様な視点からの評価を加味しながらカリキュラムの再検討を重ねていかなくてはならない。ここで確認された多くの課題については機会をあらためて報告したい。

今回、3報にわたって研究の成果を報告することになった。この研究を推進する過程において、平成10年度附属教育実践研究指導センター課題研究プロジェクト及び平成11年度教育研究改革・改善プロジェクト経費の配分を得ることができた。今回の報告は、その成果の一部であることを付記し、感謝の意を表する。